



— もくじ —

見えない・へ・そ・の・お	2
「なもあみだぶつ」と「おかあさん」	7
一人で……行けるか?	12
お慈悲のお布団	17
赤いカーネーション	25

挿絵／仲田 万里子

ほうわ・HOWA・法話18

ののさまにいだかれて

内田 正祥

くお慈悲のぬくもりく

見えない・へ・そ・の・お

あれは、いつの日のことだっただろう。たぶん私が小学一、二年生の頃だったと思います。小さな桐の箱の蓋を開けると、見たことのない不思議なものが綿花に包まれて入っていました。箱の裏を見ると一九五七（昭和三十二年）四月三日・四〇三〇グラムと書かれていました。母のもとに持って行って、

「お母ちゃん、これって何？」

と尋ねると、母は、

「ああ、それは、臍へその緒お」

と答えました。私が胎児として、母のお腹の中にいた頃、母から臍の緒を通して栄養をもらっていたのだと教えてくれました。「へえ、そうなんや」と言いながら、自分のお臍を初めて、まじまじと見つめていたことを思い出

しました。ここで、お母ちゃんと繋がっていたんだ……。

その後も時々、箱を開けては見ていたように思います。その度に、母から聞かされたのは、大きな赤ちゃんでとても難産だったということ。死ぬかと思うほど苦しかったということ。父が骨の丈夫な子が生まれるようにと、カルシウム剤を臨月になるまで母に飲ませていたこと。後で、助産師さんから、「そんな、産まれるまで、たくさん飲んだら、あかんやろ！」

と、叱られたこと等々。私の知らない、私の生まれた時のいろんなことを聞きました。

ずいぶん大変な思いをして、苦しんで、母は私を産んでくれたのだなあと思うと同時に、生まれてくる時、僕も苦しかったのかなあと思ったりもしました。

「臍の緒……あれっ!? どこにいったんだらう？」と思いながら、仕方な

く臍の緒の繋がっていた場所、自分のお臍をあらためて見つめている今、五十七歳の春です。

ふと、以前にお聞かせいただいた、ある先生のお話を思い出しました。「仏性」というお言葉の解釈をしてくださる中で、阿弥陀さまと私の関係は、たとえて言えば、お母さんと、お母さんのお腹の中にいる胎児のような関係だと教えていただきました。今、私は、阿弥陀さまの大きな願いと無量の寿に育まれているのです。

「必ず、私と同じおさとの仏さまに生まれさせます。いのち尽きることはない仏さまに生まれさせます」

という阿弥陀さまのご本願は、私を胎児のように包み込んで育てくださっています。ですから、私の「いのち」は、死んでいくのではなく、仏さまとして生まれていく「いのち」を生かされているのです。「往生」というお言

葉は、そのことをお示しくくださるお言葉なのです。

阿弥陀さまと私は、見えない臍の緒で繋がっているのではないのでしょうか。自分の力では仏となれるはずのない私に、阿弥陀さまは、仏となるに十分な功德、ご自身のすべての功德を私に届けてくださっているのです。「南無阿弥陀仏」という、名前となって、声となって、私に至り届いてくださっているのです。

平等心をうるるときを 一子地となづけたり
一子地は仏性なり 安養にいたりてさとるべし

〔註釈版聖典〕五七三頁

というご和讃をお味わいさせていただく時、私を一人子のように思い、私に

すべての栄養を送り届け育ててください、やがて、お浄土へ仏さまとして生み出してください。「いのち」のお母さんが、阿弥陀さまだったと知らされま
す。「大変なご苦労」という言葉では言い尽くし切れないほどのご苦労の末に、
私を仏さまに生まれさせるご準備を整えてください、今なお、そのご苦労の
真つ最中の「いのち」のお母さんのような存在が、阿弥陀さまなのです。

有り難うございます、よろしくお願いいたします、阿弥陀さま。できるだ
け、はからったり、抵抗したりしないで、阿弥陀さまに、これ以上のご苦労
をおかけしないでお浄土に生まれさせていただきたいと思いますが……申し
訳ございません。

「なもあみだぶつ」と「おかあさん」

この年齢になると、恥ずかしくて照れくさくて、人前では呼べませんが、
家の中では、未だに母のことを「お母ちゃん」と呼んでいます。小学校に入
学する前の二年間、私は常盤ときわ保育園というところに通っていました。生まれ
て初めて、教えてもらった歌を、なぜか今でも覚えています。

お母さん お母さん お母さんば お母さん

なんにもご用はないけれど なんだか呼びたい お母さん

（『おかあさん』作詞・西條八十）

という歌です。五歳頃の記憶ですが、なんとなく歌っている子どもの気持ち

がわかっていたように思います。

「お母ちゃん」と呼ぶのは、何か用事がある時だけではなく、何も用事のない時でも呼びたくなる……そんな言葉が「お母ちゃん」だったように思います。

ご縁に恵まれて子どもを授かって気づいたのですが、連れ合いは一日に何度も何度も、

「お母さんよ！」

「お母さん、おるよ！」

「お母さん、来たよ！」

と、自分から「お母さんですよ」と名のつていました。いったいどれくらいの回数になったのでしょうか。いつしか子どもは「かあかあ」と呼び返すようになりました。

数年前、私どものお寺のご法座にお越しいただいた布教使さんが、「親が二万回から三万回くらい『お母さんですよ』と呼びかけた頃に、子どもが呼び返すようになる」というお話をしてくださいました。

一日に五十回「お母さんよ」と名のつたとして、二万五千回になるには、五百日かかります。「だいたい一歳四〜五カ月くらいかなあ？」と考えながら思い返すと、確かに、息子が呼び返すようになったのは、そのくらいの時だったように思います。

ある日、連れ合いが私に、「今日、初めて、『かあかあ』って、呼んでくれたわあ」って、満面の笑顔とともに言ってきました。とても嬉しそうだった



たことを覚えています。悔しいことに、息子が「とおとく」と、私を呼んでくれたのは、それから半年も後のことでした。

なぜだろう、どうして六カ月も遅れてしか呼んでくれないのだろう。やっぱり呼びかけの絶対的な回数之差とスキンシップの差なのでしょうか。連れ合いは、いつも息子のそばにいて、抱っこして、お乳をあげて、おむつを替えて、「お母さんよ」と微笑みかけておりました。

母親の優しさ温かさを感じながら、親であることの名のりを聞き続ける中で、呼び返さずにはいられなくなる。そして「かあかあ」と溢れ出してくるのでしよう。「かあかあ」と「とおとく」と、歴然と呼び返す時期が違うのは、連れ合いと私の、この違いがあるからなのだろうという思いに至りました。

ご法話の中で「南無阿弥陀仏」は阿弥陀さまからのお喚び声だと、聞かせていただきます。私が阿弥陀さまを阿弥陀さまと気づく前から、阿弥陀さまは私に向かって喚び続けていてくださったのです。ご聴聞ちやうもん（ご法話を聞くこと）を通して、阿弥陀さまのお慈悲の優しさ、温かさ、尊さを感じさせていただくうちに、いつしか「南無阿弥陀仏、なんまんだぶつ」と呼び返さずにはいられない私に、お育てをいただいていたのではないのでしょうか。

「あなたの『いのち』の親が、ここにいますよ！」

「いつもそばにいますよ！」

「必ず、あなたを仏さまにならせてみせますよ！」

「さあ、私の名を、『南無阿弥陀仏』を称えてくださいね！」

と、名のり続け、喚び続けていくくださるお方が、阿弥陀さまでありました。「南無阿弥陀仏」のお念仏を称えているのは私ですが、称えさせているのは、

阿弥陀さまの願いとおハタラキが至り届いている相すがたなのだと味わわせていた
できました。

二人目に娘を授かりました時には、頑張つて、一緒にいられるときはできるだけ傍にいて、「お父さんだよ、お父さんだよ」と呼びかけました。でも、やっぱり「かあああ」が先でした。三カ月遅れての「とおとお」でしたが、呼ばれた時は、とっても嬉しかった……。阿弥陀さまも、私が「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えると、きつと喜んでくださるように思うのですが、どうでしょうか？ 阿弥陀さま！

一人で……行けるか？

あれはもう、二十四年ほど前のことだったのでしょいか。私が初めて遠方に

布教のご縁をいただいた日のことです。当日の朝、始発に乗ろうと思い、急いで身支度をしておりましたら、母が来て、

「今日は遠い所へ行くんやね。一人で……行けるか？」

と言いました。私は絶句してしまいました。

「冗談やる？ いくつになつたと思つてるんや、もう三十三歳やで！ ええかげんにして欲しいわ！」と腹立たしく思いながら出かけました。

ところが、一人で電車に乗っていると「この電車で間違いないかなあ……。次は何番ホームから乗るのかなあ……。時間通りに着くかなあ……。」と、だんだん不安になってきました。じつは私、一人で電車に乗るのがあまり好きではないのです。小さい時からそうでした。

三回乗り換えて、ようやく最後の路線に乗り換えた時、お母さんに手を握られた小さな子が一緒に乗ってきました。電車が走り出すと、その子は時折

一人で……行けるか？

後に並んでいる私に気づいた息子さんが、「今日のところは、お母さんに買ってもらいます」と譲ると、お母さんは嬉

「あなたは私の子どもじゃないですか！ 子どもの切符は親の私が買います」
「いいえ、お母さんの切符くらい、息子の私が買います！」
もめている原因はどちらが切符を買うかということのようでした。



お母さんを確認しながら、楽しそうに窓の外を眺めていました。そんな様子をみていたら、今朝、「一人で行けるか？」と尋ねてきた母のことを思い出しました。「小さい頃から、一人で電車に乗るのが不安だった私のことを、ちゃんと覚えてくれてたんだなあ、いくつになっても心配してくれてたんだなあ」と思い返していたら、腹立たしさを忘れて、「有り難いことなんだなあ」という気持ちになりました。

目的地の駅に着くと、まだ時間にはかなりの余裕がありましたので、帰りの切符を買っておくことにしました。帰りの切符は自動券売機では買えないので、駅員さんのいる窓口に並びました。すると私の前にいた二人の方がもめていました。よくよく二人のやりとりを聞いていると、八十歳過ぎくらいの女性と六十歳過ぎくらいの男性、どうやら親子のようでした。

しそくに、

「子どもの切符くらいは親の私を買いますよ！　〇〇駅まで大人一枚！
子ども一枚！」

と大きな声で駅員さんに言いました。駅員さんは笑いながら、

「だめです、大人二枚ですよ」

と答えていました。私も思わず大笑いをしてしまいました。お母さんは恥かしそうに「はい、大人二枚です」と言い直しました。ここにも、いくつになろうと我が子を思っ止まぬお母さんがいました。とても温かな気持ちになって、会所えしよのお寺に向かうことができました。

阿弥陀さまもまた、いつでも、どこに行く時でも、私を心配しててくださいっているのです。「あなたが、私と同じ仏さまに成るまで、私はあなたの元を決して離れることはありませんよ」と、ご一緒していただく親さま

が、阿弥陀さまというお慈悲の仏さまでありました。

お慈悲のお布団

私が住職となって間もない頃、あるおばあさんに出会いました。第一印象は「困ったおばあさんやなあ」でした。それというのも、住職となって間もない私が、ドキドキしながらご法事の後の法話をさせていたかどうかとすると、「あゝ！　お説教、お説教！　ありがたいなあ、なんまんだぶ、なんまんだぶ」と、まだ何も話してないうちからおっしゃり、話の最中に「うん、うん」「へえ」と大声を出して大げさに頷かれます。不慣れな私はますます緊張してしまいます。

しかし、お出合いを重ねていくうちに、だんだんと、そのおばあさんのこ

とが有り難くなっていきました。時折、「阿弥陀さんのお慈悲はあったかいなあ」と独り言のようにおっしゃいます。何よりご法事が楽しくて仕方がないという雰囲気伝わってくる、阿弥陀さまのことが大好き、といった感じのおばあさんでした。

その方は、ご門徒の親戚の方でしたので、ご法事のときにしかお会いできませんでした。初めての出会いから二十年ほど経って、二、三年ぶりにお会いできることを楽しみにうかがったご法事に、おばあさんの姿がありません。お参りの方にお尋ねすると、一人の男性が、

「私の母のことですね、今日は私が代わりにお参りさせてもらいました」と言われました。

「おばあさんは、お元気ですか？」とお聞きすると、

「母は昨年の冬、ご往生させていただきました」

とのお返事でした。私は、寂しさが込み上げてきました。

うなだれている私にその方が、

「ごえんさんは、母の口癖を知っていますか？」

と尋ねられました。

「はい、知っていますよ。『阿弥陀さんのお慈悲はあったかいなあ』でしょ」と言うと、

「そうですね……。母は最後に、その口癖の意味を私たち子どもに教えていてくれました。聞いてくださいますか？」

と言われます。私は「ぜひとも聞かせてください」とお願いしました。

* * * * *

母が床に伏すようになったのは、昨年の夏の終わり頃でした。お医者さんからは、「なにぶん九十六歳という高齢ですから、回復することは難しいです」と言われました。

冬になった頃、呼びかけても返事はなく、微かな寝息をたてているだけになっていったその日、母の枕元に子どもたち全員が集まっていました。ちょうど、先生が往診に来てくださり、診察を終えて帰られる時に、私たちにだけ聞こえるような小さな声で、「あと、二〜三日というところでしょうか」と言われました。

一番下の弟が、先生を玄関まで送って行って、何やら話していました。戻ってきて、私に言うのです。

『先生におふくろを抱っこしてもいいか？』って聞いたら、『そ〜っとなら、いい』って言うてくれたから、抱っこさせてもらおうわな』

そう言うて弟は、母をそっと抱き上げて、

『軽うなつてしもたな！ 苦労かけたな！ 俺が一番長いこと甘えとったなあ……ごめんな、ありがとうな！』

と言いながら布団に戻しました。

それを見ていた他の兄弟たちも代わる代わる母を抱っこしては、お礼を言いました。私も同じことがしたくなって、母を抱き上げようとしたのですが、私だけ腕や足腰に力がなくて……できませんでした。何かしたいと考えているうちに、添い寝くらいならできると思いついて、母の布団に入って母の身体をさすっていました。いつの間にか私は眠ってしまったようで、しばらくして、すすり泣く声が聞こえて目が覚めました。兄弟たちが泣いていました。なぜ泣いているのだろうと隣を見ると、母は隣に寝ている私に気づいたのでしょうか。骨と皮だけになったシワだらけの手で、自分の布団を私に掛けよ

うとしていました。寒い日でした。私に風邪を引かせてはならないと思っ、最後の力を振り絞るように、母は私に布団を掛けようかけようとしています。何度も何度も指先から布団が落ちてしまいます。それでも止めることなく、母は自分の背中が布団から出てしまっても、私に布団が全部掛かるように掛け続けてくれました。

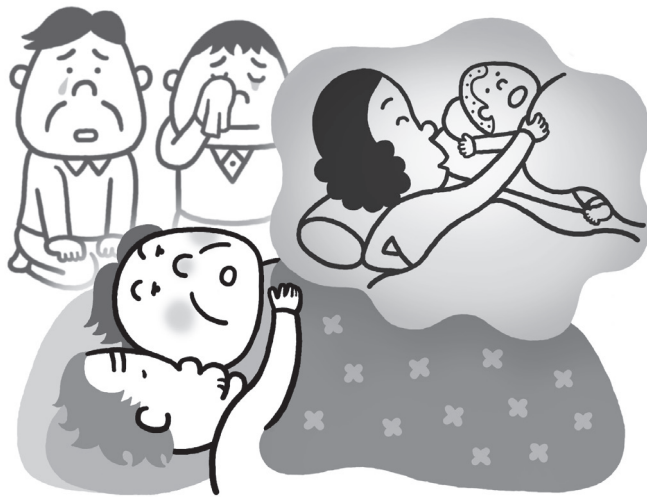
兄弟たちのすすり泣く声の意味が私にもわかりました。母は抱っ

こしてもらいたかったのではありませんでした。母はお礼を言って欲しかったのではありませんでした。母は最後まで、子どものが、私のことが、心配で心配でならなかったのです。温かいお布団でした。私も何十年かぶりに、母の胸に顔を埋めて泣かせてもらいました。

ごえんさん！ 母は最後まで、母をやめませんでした。母は最後まで、母であり続けました……。母の口癖だった、「阿弥陀さんのお慈悲はあったかいなあ」という口癖の意味は、こういうことなんだと、母の最後の姿を通して知らせていただきました。それから三日後、母は静かにご往生させていただきました。

お聞きくださって、ありがとうございました。

* * * * *



と話してくださいました。

「ごちらこそ、お聞かせくださって、ありがとうございます。ありがとうございました」と、お礼を申しつつ、私も泣かせていただきました。

親鸞聖人は阿弥陀さまのお心を、「大悲無倦」(『聖典全書二』六四頁)とお示しくなさっておられます。このお言葉は「正信偈」の中に出てまいります。「大悲ものうきことなくして」(『註釈版聖典』二〇六頁)と書き下してお読みいたします。このお言葉のお意を、また親鸞聖人は「高僧和讃」のご左訓に「怠り捨つるころなしとなり」(『註釈版聖典』五九五頁)とお示しくなさっています。

おばあさんは、最後の最後まで、子どものことを思い続けるご自身の姿を通して、阿弥陀さまのお心とおハタラクを、決して諦めることのない、見捨

ててしまうことのないお慈悲の温かさ、有り難さを伝えてくださったのですね！

「南無阿弥陀仏、なもあみだぶつ」

赤いカーネーション

もう三十年以上前になるでしょうか。本願寺の月刊誌「大乘」に掲載されていた童話が、今でも心の底に温かく残っています。私の記憶の中のお話ですので、実際のお話通りには正確にお伝えできませんが、お許しください。

* * * * *

一人の女の子がいました。名前は法子ちゃん。法子ちゃんはお母さんの顔

を知りません。法子ちゃんが生まれるとすぐに病気で亡くなったからです。お母さん代わりのおばあちゃんに大切に育てられた法子ちゃんは、この春、幼稚園に通うことになりました。

入園式の日、法子ちゃんと同じ新入園児たちの傍らには「お母さん」と呼ばれる人がいました。おばあちゃんに可愛がられて、何不自由なく、さみしい思いも感じていなかった法子ちゃんでしたが、その時、はじめて自分には「お母さん」がいないことを実感したのでした。

「どうして法子には、お母さんがいないの？」

と尋ねられたおばあちゃんは、入園式を終えて家に帰ると、法子ちゃんと一緒にお仏壇の前に行き、お灯明をあげ、お線香に火を付けると、二人で仏さまの前に座りました。

法子ちゃんのお母さんは、亡くなる前に、おばあちゃんに、たった一つだ

けお願いをして往かれました。

「法子が大きくなって、このことが分かるようになったら、伝えてください。

私は仏さまにならせていただきます。そして、いつでも法子のことを見えます。いつも法子のそばにいます」

生まれたばかりの法子ちゃんに直接伝えることができなかったお母さんは、おばあちゃんに頼んでいかれたのでした。

「よく聞いてね。あなたのお母さんから頼まれていた大切なお話があります。……あなたのお母さんは、いないではありません。お母さんは、仏さまになって、いつもの法子のことを見ていてくださるよ。私たちの目には見えないけど、いつも法子のそばにいてくださるよ！」

と伝えました。

法子ちゃんは元気に幼稚園に通い始めます。四月が終わり五月になると、

幼稚園の先生は、

「もうじき、母の日ですね。母の日に、お母さんのお顔の絵を描いて、プレゼントしましょう」

と、子どもたちに言いました。そして、母の日の前日の土曜日に、

「お母さんのお顔の絵が描けましたね！ 一日早いですが、お家に帰ったら、早速お母さんにプレゼントしてくださいね！ カーネーションのお花を用意しましたから、一緒にプレゼントしてくださいね！」

そう言うと先生は、みんなに赤いカーネーションを配りました。みんなが赤いカーネーションをもらうのに、法子ちゃんにだけ、先生は白いカーネーションを渡します。法子ちゃんは「どうして？」と尋ねます。先生は、

「法子ちゃんは、お母さんいないでしょ！ お母さんいない子は、白いカーネーションなんですよ」

と答えます。法子ちゃんは、受け取りません。

「先生、私は、赤いカーネーションです。赤いカーネーションください！」

と言います。何度もそのやり取りが続いて、先生は仕方なく法子ちゃんにも赤いカーネーションを渡しました。

元気に幼稚園から帰ってくる
と、法子ちゃんは、真っ先に仏さまの前に座りました。そして、小



さな掌を合わせて、大きな声で、

「お母さん、ありがとう。いつも、法子のこと見ていてくれて、ありがとう。そばにいてくれて、ありがとう」

とお礼を申してくださいました。その姿を見て、その言葉を聞いて、おばあちゃんは、嬉しくて、うれしくて涙がいっぱいこぼれてきました。ご仏前には、お顔の周りに黄色のクレヨンで、くるーつと後光が描かれた仏さまのお顔の絵と真っ赤なカーネーションがお供えされてありました。

* * * * *

生まれたばかりの我が子と別れていかねばならない、断腸の思いの中で、お母さんは「必ず仏さまにならせます」という阿弥陀さまのお誓いを、どれほど頼もしく聞いておられたことでしょう。我が子のことを思う親心、仏さ

まとなって、お慈悲のはたらきとなって、この子を見護っていきける、寄り添っていきける。阿弥陀さまのお救いの中で、初めて超えて往けた悲しい別離^{わか}れだったのではないでしょうか。お母さんは、自分のこととして、自分の「いのち」のこととして、阿弥陀さまのご本願を聞いておられたのだと、お母さんの尊さを私は思ったことでした。

この「赤いカーネーション」のお話は、三十年以上前に読ませていただきました。時代設定としては、三十年前よりもっと前のお話だと思います。

私が保育園に通っていた頃、クラスの友だちの一人が、淋しそうに白いカーネーションをもらって帰ったことを覚えています。赤と白に色分けすることの是非は、白いカーネーションをもらう子どもの気持ちを考えてみれば、わかることでした。

著者紹介



内田 正祥 (うちだ しょうしょう)

三重県正覚寺住職、本願寺派布教使。

ほうわ・HOWA・法話 18

ののさまにいだかれて～お慈悲のぬくもり～

2014年4月1日 第一刷発行

2018年7月10日 第四刷発行

著者 内田 正祥

発行 本願寺出版社

〒600-8501

京都市下京区堀川通花屋町下ル

浄土真宗本願寺派 (西本願寺)

TEL 075 (371) 4171 FAX 075 (341) 7753

【本願寺出版社ホームページ】

<http://hongwanji-shuppan.com/>

印刷 河北印刷株式会社

KK002-SH4-① 70-81

日本音楽著作権協会(出)許諾第 1403478-804 号



2 000100 076026

成人して久しい私の子どもたちに聞いてみると、「母の日のカーネーション? 幼稚園や学校でもらったことないよ」と言っていました。今では、ほとんど、そうしたことは行われていないようです。

きっと誰かが、「赤と白に分けるのは、やめて!」と声を上げてくださったのでしよう。

一人ひとりを思い合う心を忘れてしまったら、「自他ともに心豊かに生きる社会」は築いてゆけないでしょう。

お念仏申しつつ、み仏とともに、みんなで生きて
往きましょう。

合掌称名

